

【日本語】とは？

一節 = 「文字の歴史」

日本語の特徴は、「漢字、ひらがな、カタカナ、ローマ字」の四種類の文字を使い分けて書くことだ。世界の言語の中でも、最も難しい文字体系と言われている。

「だから日本語は難しい」、逆に、「この特性が、日本語の表現をおもしろくし、豊かにしている」、という異なった二つの見方がある。

《漢字》

古代の日本に「日本語」はあったが、「話し言葉」だけで、表記法はなかった。

3、4世紀頃、中国や朝鮮半島から、「漢字」という文字が伝わった。

日本人はこの便利なものを取り入れて「日本語」を書き表そうとした。

しかし、すでに存在していた「日本語」の発音や言葉の決まりが中国語と違うため、自分たちの言葉を捨てて、すぐに、ほかの国の言葉に替えることはできなかった。

そこで、日本人は中国の文字は借りるけれども、「日本語」に都合の良い方法で使うことを考えた。

「音読み」は、中国語の発音を受け入れようとしたが、自然に日本語風の発音になった。

それは、中国語の発音と似ているけれど、同じではない。

例えば、「東京」、「梅花」、「水仙」、「砂糖」、「芭蕉」という日本語の発音は中国語の発音とは違う。その上、「東」、「梅」、「花」などの漢字を日本語の「訓読み」でも読んだ。その結果、「音読み」、「訓読み」という二つの読み方が生まれた。

さらに、日本は「漢字」の読み方について、呉音、漢音、唐音など、異なる時代の発音を受け入れたため、「音読み」が三種類もある「漢字」がある。

例えば、「訓読み」で「行く」という「漢字」の「音読み」は、「修行（しゅぎょう。呉音）」、「銀行（ぎんこう。漢音）」、「行脚（あんぎゃ。唐音）」などがある。

ちなみに、奈良時代に書かれた「古事記」（712年）に用いられた「漢字」の種類は1,507字、「万葉集」（759年）は2,501字、と言われている。

「漢語」は日本に入ってから長い歴史を経て、さまざまな変化を見せた。

① もともと「和語」（「大和言葉」）だったのが、それに対応する「漢字」を当てはめて使っているうちに、その読み方が「音読み」になった。

「おおね→大根→ダイコン、ひのこと→火事→カジ、かえりごと→返事→ヘンジ」な

ど。

② 日本人が意味を考え、それから「漢字」を組み合わせて日本風の「音読み」にした。
「電話、汽車、郵便、会社、配達、人力車」など。

③ 日本人が作った「漢字」が「国字」だ。

中国にはなかった物の名前や概念を「漢字」で表したもの。諸橋轍次著の「大漢和辞典」では、国字の数は畑、働、風、峠、躰、扱、鰯、鰻、粿、など 141 字。

【万葉仮名】

古代の日本人は、「漢字」で自分たちの言葉を書き表そうとした時、「漢字」の意味に関係なく、「一つの漢字を一音」として発音し、「音」だけで書いた。

懐かしい（なつかし）＝「名津蚊為」 雪（ゆき）＝「由岐」

雨（あめ）＝「安米」、など。

最初は、「一音」を表す「漢字」が人によって異なっていた。

例えば、「あ」を表す「漢字」として、「安、阿、愛、惡」などが使われた。

それが整理されて「日本式漢字」になり、この表記法が「万葉仮名」だ。それを多く利用して日本で一番古い歌集「万葉集」が出来上がった。

「万葉仮名」から「ひらがな」と「カタカナ」が生まれるまでに、長い時間がかかった。

《ひらがな》

「ひらがな」は、「漢字」、「万葉仮名」の時代を経て生まれた。

いろいろな「漢字」使って「言葉」を表したが、「漢字」は画数が多くて面倒なため、使われる字が限られた。また、筆で書いているうちに、流れるような草書体で書くようになった。話す言葉をそのまま書く「万葉仮名」はこうして人々の間に広まったが、「漢字」であることに変わりはなく、もっと簡単に書けるように、と考えられたのが「かな」だ。

「安」という「漢字」を草書風に崩して書くと「あ」になる。

こうして「かな」が完成し、平安時代(794 年～1192 年)には女性がよく使うようになったため、「女手」と呼ばれた。「漢字」を使い、漢文を勉強していた男性は「漢字」にこだわって、「かな」という簡単な表記法をなかなか使わなかった。

こうして誕生した「かな」は、平安時代に女流文学の華を咲かせた。

後世になって、「ひらがな」と呼ばれるようになった。

《カタカナ》

「あ」と「ア」は同じ発音なので面倒だが、上手に使い分ければ便利なものだ。

「ひらがな」が「安」という「漢字」の全体を使って「あ」が作られたのに対して、漢字の一部分だけを借りて使い始めたのが「カタカナ」だ。

ア(阿)、イ(伊)、ウ(宇)、エ(江)、オ(於)など。

9世紀の初め、僧侶が書物に「^{せい き}印」を書き加えた。

中国の^{むずか}難^{きょうてん}しい^{きょうてん}経典を日本語の発音で訓読みしていた時、覚えやすいように、中国語の横に「カタカナ」のようなメモを付けた。返り点、送りがな、振りがな(カタカナ)などだ。

10世紀になって、その一つだった「カタカナ」が独立した文字として使われ始めた。

さらに、11世紀になると、僧侶たちが文章や和歌を書くのに、便利な「カタカナ」だけを使うようになった。

「カタカナ」は文字として一人歩きを始めた。

そして、「漢字」や「ひらがな」より簡単な文字として、人々に愛され、広く普及していった。

今の「カタカナ」の字体が固まったのは1900年頃だ。

小学校に入学した時、まず「カタカナ」を習い、「ひらがな」が「カタカナ」より難しく程度が高い文字として扱われた時代もあった。

1945年(昭和20年)に、文字の使い方が大きく変わった。

普通の文章では「漢字」と「ひらがな」を使い、「カタカナ」は特別な時に使う文字になった。外来語、外国語、動物や植物の名前、擬声語、擬態語などを表す時に、「カタカナ」が使われることが多い。

《ローマ字》

「ローマ字」も、「ひらがな」や「カタカナ」のように発音だけの字だ。

ラテン文字に由来し、一般に、英語のアルファベット26文字を指す。

パソコンのキーボードで入力する時など、「ローマ字」が使われる機会が多くなった。

室町時代(1338年～1573年)の終わり頃、ポルトガルの宣教師たちが、ポルトガル語を基本にした「ローマ字」を日本に伝えた。その後、幕府によってキリスト教の布教が禁止され、オランダ人だけが貿易のために日本に入国を許され、オランダ人に分かりやすい「ローマ字」が使われた。

欧米諸国との国交が開かれて、別の表し方が生まれ、アメリカ人宣教師のヘボンが1867年に表した「ヘボン式」ローマ字が基本になった。そして、日本の学者が「日本式」の「ローマ字」を考案した。

ヘボン式は「し→shi、ち→chi、つ→tsu、じ→ji」など、英語を話す人の発音に合わせてた。

これに対して、「日本式」は、例えば、「さ行」は「さ→sa、し→si、す→su、せ→se、そ→so」と、「s」のあとに「a i u e o」を付けた。

ヘボン式と日本式の良いところを取り入れたのが「訓令式」だ。

1954年(昭和29年)に国語審議会が「訓令式を中心としたローマ字のつづり方」を建議し、現在、学校教育では小学3年生から学んでいる。

ヘボン式や日本式も一部で使われているため、混乱もある。

例えば、長音を示すのに、「O」、「上に印を付けるō」、「OO」の三通りある。「T O K Y O(東京)」のように、神戸を「K O B E」と書くと、「こべ」と発音する外国人もいる。

二節 = 「話し言葉」と「書き言葉」

日本語の歴史を振り返ると、人々が「生活の中で使う言葉」と、「文字で書き表す言葉」の間に大きな違いがある。

「話し言葉（しゃべり言葉）」を文章にしたのが「口語文」で、「書き言葉」を書いた文章を「文語文」という。

明治時代に日本の社会は一大変化を遂げ、国を一つにまとめるため、義務教育が始まった。しかし、人々が毎日の生活で使う会話の言葉と、本などに書かれている文章は同じではなかった。そこで、二葉亭四迷、山田美妙、尾崎紅葉などの小説家が、「口語文」を小説の中に使って書き、「文章の言葉」と「話す言葉」を近づける「言文一致運動」を続けた。

現代の言語生活では、「話し言葉」と「書き言葉」の壁はかなり薄くなっている。

◇ 話し言葉 ◇

相手が文字を見ないで耳から聞いて内容を理解するのが「話し言葉」だ。

「コミュニケーション」の時代には、人の話を聞いて理解することが極めて重要だ。

そのために、「話し言葉」に大切な条件がある。

例えば、学生が「あの先生の講義はよく分からなかった」と感じる場合、次のような理由が考えられる。

- ① 声をはっきりしないため、聞き取りにくい。
- ② 「テーマ」の起承転結がはっきりしない。
- ③ 言葉の意味が難しく、理解できない。
- ④ 書いたものをそのまま読んで、など。

優れた「話し言葉」は、まず、聞き手に心地良い響きと人間的な温かみを感じさせることが大切だ。「話し手」は、聞いている人の年齢や立場や状況などを考えて、話の内容、言葉、構成を選んで決めなければならない。話の中にユーモアを上手に取り入れたら、「聞き手」の気持ちを和ませることができる。

【漢字の多様な読み方】

海外の日本語学習者の多くは、「漢字」の読み方が何通りもあることで苦労する。

例えば、「日」という「漢字」は、「その日、3日、土曜日、一日、一日中、昨日、昨日、日本」など。読み方に特にルールがあるわけでないので、厄介だ。

【「ツッコミ語」と「ら抜き言葉」】

文化庁が2011年に行った国語世論調査によると、近年、「ツッコミ語」と「ら抜き言葉」が広く使われるようになった。

①寒^{さむ}っ(寒^{さむ}い)、すご^{みじか}っ(すご^{みじか}い)、短^{はや}っ(短^{はや}い)、長^{なが}っ(長^{なが}い)など、形容詞の語幹を使った言い方が「ツッコミ語」だ。

例えば、「東京^{とうきょう}はとても寒い^{さむ}ところです」を「東京寒^{さむ}っ」と言う。

驚^{おどろ}きを伴^{ともな}って、短^{みじか}く表^{ひょうげん}現する時に使われる。

②「ら抜き言葉」は、来^これる(来^こられる)、食^たべれる(食^たべられる)、見^みれる(見^みられる)など、本来使われるはずの「ら」を抜いて言う。

いずれも、テレビのお笑^{わら}い番^{ばん}組^{ぐみ}や若^{わか}者の会^{かい}話^わが始^{はじ}まり。

自^じ分^{ぶん}の気^き持^もちを相^あ手^てに簡^{かん}潔^{けつ}に伝^{つた}えられるため、メー^{ひろ}ルで広^{ひろ}まった。

◇ 書き言葉 ◇

作^{さく}文^{ぶん}や論^{ろん}文^{ぶん}などの「書き言葉」で注^{ちゅう}意^いしなければならないのは、「話し言葉」を使わな
いということだ。

文章の接^{せつ}続^{ぞく}の時に、「けど」、「だけど」、「だって」などの「話し言葉」を使うのは正^{ただ}しく
ない。

「ちょっと分^わからない」、「、、しちや^{わたし}った」、「私^{わたし}じゃない」なども同^{どう}様^{よう}だ。

「す^{やさ}ごく易^{やす}しい」、「さ^さっぱり分^わからない」、「超^{ちょう}難^{なん}しい」なども「話し言葉」として使わ
れるが、文章ではあまり使わない。

た^{ただ}だ、親^{あい}しい間^{かん}柄^{がら}では、儀^ぎ礼^{れい}的^{てき}な手^て紙^{がみ}を除^{のぞ}いて、「話し言葉」を文字にして書^かくことも
ある。

また、小^{ぶん}説^{げい}などの文^{ぶん}芸^ぎ作^{さく}品^{ひん}にもさ^さまざ^ざまなス^うタ^うイ^うルが生^うまれている。

三節 = 「敬語」

【敬語の役割】

「敬語」は、日本語の特徴的な性格を持っている。

日本人は言葉を用いる時、相手や周囲の人、また、その場の状況に合わせて、「敬い」、「へりくだり」、「改まった気持ち」を表現する。

「聞き手」や「話題とする相手」をどう待遇するか。つまり、「外の人間」として他人扱いして「敬語」を積極的に使うか、それとも「内々の人間」として「敬語」抜き言葉にするか、を決める。

「敬語」は「相手や周囲の人と自分との関係」を表現するもので、コミュニケーションを円滑に行い、確かな人間関係を築いていく上で不可欠だ。

日本語では、「外の人間」か「内の人間」か、によって、表現や語彙を決める。

他人をどう待遇するか。つまり、相手を「上下」と「親疎」の関係で、どちらに位置付けるかという問題だ。

日本人の人間関係は、遠慮・敬遠からだんだん親密な間柄へ進むのが自然だ。

外国人が日本人を「取っ付きにくい」、「付き合いにくい」、「日本人は何を考えているのか分からない」と感じるのも、「敬語」を使う側の心理状況と関係がある。

「敬語」は従来、

- ① 尊敬語（「いらっしゃる」などの敬う言葉）、
- ② 謙譲語（「伺いする」などの、へり下る言葉）、
- ③ 丁寧語（「～です。～ます。～でございます」などの言葉）の三つに分類されていた。

これを、文部科学省の文化審議会が2007年2月、新しい「敬語の指針」をまとめ、以下の五種類に分けた。

- (1) 尊敬語 「いらっしゃる・おっしゃる」
- (2) 謙譲語Ⅰ 「伺う・申し上げる」
- (3) 謙譲語Ⅱ（丁重語）「参る・申す」
- (4) 丁寧語 「です・ます」
- (5) 美化語 「お酒・お料理」

五種類に分けることで、「敬語」をより的確に理解し、説明できるようになった。

例えば、「行く」という意味の「敬語」である「伺う」と「参る」は、これまで、「謙譲語」だったが、新しい分類では、両者の「性質の違い」に基づいて、「伺う」を「謙譲語Ⅰ」、「参る」を「謙譲語Ⅱ」に分けた。

[五種類の敬語] (「敬語の指針」の主な内容は次の通り)。

(1) 尊敬語

相手側または第三者の行為・ものごと・状態などについて、その人物を立てて述べるもの。

(人を立てる＝人を自分より上位に置いて尊重すること)。

△「行為等(動詞、及び動作性の名詞)」

- ・いらっしゃる(←行く、来る、いる)
- ・召し上がる(←食べる、飲む) ・下さる(←くれる)
- ・お使いになる。御利用になる。読まれる。始められる。

△「ものごと等(名詞)」

- ・お名前。御住所。(立てるべき人物からの)お手紙。

△「状態等(形容詞など)」

- ・お忙しい。御立派。

(2) 謙譲語 I

自分側から相手側または第三者に向かう行為・ものごとなどについて、その向かう先の人物を立てて述べるもの。

- ・伺う(←訪ねる、尋ねる、聞く) ・申し上げる(←言う)
- ・いただく(←もらう) ・拝見する(←見る)
- ・拝借する(←借りる) ・お目に掛かる(←会う)
- ・お届けする。御案内する。(立てるべき人物への)お手紙。御説明。

(3) 謙譲語 II (丁重語)

自分側の行為・ものごとなどを、話や文章の相手に対して丁重に述べるもの。

- ・参る(←行く、来る) ・申す(←言う)
- ・存じる(←知る、思う) ・拙著。拙宅。小社。

※ 「自分の行為や行動の《向かう先》に対する敬語」と、「コミュニケーションにおける《相手》に対する敬語」とでは、性質が異なるため、前者を「謙譲語 I」、後者を「謙譲語 II」と区分けした。

(4) 丁寧語

話や文章の相手に対して丁寧に述べるもの。 ・です。ます。

(5) 美化語

ものごとを、美化して述べるもの。 ・お酒。お料理。

《「お」と「御」》

「お」あるいは「御」を付けて「敬語」にする場合の「お」と「御」の使い分けは、「お＋和語」、「御＋漢語」が原則だ。

- ・「お名前」。「お忙しい」。(尊敬語)
- ・「お手紙」(立てるべき人からの手紙の場合は尊敬語、立てるべき人への手紙の場合は謙譲語Ⅰ)
- ・「お酒」(美化語)
- ・「御住所」。「御立派」。(尊敬語)
- ・「御説明」(立てるべき人からの説明の場合は尊敬語、立てるべき人への説明の場合は謙譲語Ⅰ)
- ・「御祝儀」(美化語)

(注)「御」は、「堅苦しい印象」があるため、「ご」と書く場合もある。

「敬語」が難しいのは、「目上・目下」という人間関係のほかに、「内の人」か「外の人」か、「親しい人」か「よく知らない人」かによって、言葉の遣い方が違ってくるからだ。

例えば、ある会社の中で自分の上司に話す時、社員はそれぞれの立場に従って「尊敬語」を使う。しかし、別の会社の人から「社長さんはいらっしゃいますか」という「尊敬語」で電話がかかってきた時、「はい、いらっしゃいます」という「尊敬語」で返事をしてはいけない。「はい、おります。少しお待ちください」と言わなければならない。

家族の場合も同じだ。子供が両親に「尊敬語」や「丁寧語」を使っても、他人、例えば、先生には「父が申しました」という「謙譲語Ⅱ」を使わなければならない。決して「父がおっしゃいました」という「尊敬語」を使ってはいけない。

若者を中心に、日本人の「敬語」の使い方が乱れている、と指摘される。

しかし、「敬語」は、日本の大切な文化として受け継がれてきたもので、複雑な社会生活において和やかな人間関係を構築し、維持・発展させていく上で必要なものだ。コミュニケーションを円滑にする「敬語」の機能はますます重要になってくる。

「敬語」は日本人の言語生活の中で大きな役割を果たしている。

日本人の精神文化の特質の一つである「謙譲の美德」を象徴しているのが「敬語」だ。

四節 = 『^{こう じ えん}広辞苑』の『^{しん ご}新語』

国語辞書の中で最も親しまれている岩波書店の『広辞苑』が2008年1月に10年ぶりに改訂された。収録されている項目(言葉)の総数は24万語。そのうち、約1万語が「新語」として加えられた。その中から「30語」を紹介する。

いいとこどり・・自分の利益になるところだけを取り、不都合なところは引き受けないこと。

いけ面(イケメン)・・若い男性の顔かたちがすぐれていること。また、そのような男性。「かっこいい」を意味する「いけている」の略「いけ」と、顔を意味する「面」を合わせた俗語。カタカナで書く。

癒し系・・心を和ませるような雰囲気や効果をもつ一連のもの。

うざい・・わずらわしい。うっとうしい。気持ちが悪い。
(「うざったい」を略した俗語)

温度差・・ある事態や問題についての認識・反応が、人・グループによって異なっているときの隔たり。

逆切れ・・それまで叱られたり注意を受けたりしていた人が、逆に怒り出すこと。
「逆に切れる」から。

午後一・・その日の午後、最初に行うこと

自己中・・自己中心的の略。自分中心に物事を考え、他人の都合を考えないこと。

食玩・・食品玩具の略。菓子など市販の食品に付ける「おまけ」の玩具。

たられば・・「、したら」「、すれば」の末尾を重ねて、実現しなかったことを仮定した話であること、をいう俗語。

駄目出し・・仕事や行為を不採用・不可とすること。もとは演劇用語。

中食・・店で買って家に持ち帰り、すぐ食べられる調理済みの食品。外で食事をする「外食」と「家庭で作る食事」の「中間の食事」。

引籠り・・自宅や自室に長期間とじこもり、他人や社会と接触しないで生活する状態。1990年代に青少年の間で増加し社会問題化した。

右肩上がり・・「折れ線グラフで右に行くほど線が上がっていく」ことから、時を追うごとに数量が増え、景気などが上昇していく状態。

めっちゃ・・非常に。度はずれた。とても。

猛暑日・・一日の最高気温がセ氏35度以上の日。

アイコンタクト・・目で合図して、意思を伝え合うこと。

スローフード・・ファースト・フードに対して、イタリアで始まった食生活を見直す運動。「伝統的な食文化の保護、質の良い食材を供給する生産者の保護、食に関する教育」の三つを大切にする。

セカンドオピニオン・・よりの確な治療法を見つけるために、主治医以外の医者から聞く意見。

デパ地下・・デパートの地階にある食料品売り場。

パワーハラスメント・・職場で上司がその地位や権威を利用して部下に行う「いじめ」や嫌がらせ。パワハラ。(和製英語)。

マイブーム・・世間の流行(ブーム)とは関係なく、個人的に熱中していることがら。

モラルハザード・・①道徳的危険。保険加入者が、保険によって損害が補償されるために、注意を怠ったり事故を起こしたりする類。
②金融機関・企業・預金者が利益追求に走って節度を失い、責任感・倫理性を欠くこと。
③倫理の欠如、倫理の荒廃。

サービス残業・・「労働者が使用者にサービスする」意。残業手当が支払われない時間外労働。不払い労働の一つ。

准教授・・大学や高等専門学校で、教授に准ずる地位にあり、研究および学生の教育に当る教員。2007年に「助教授」を改称。

ニート【NEET】 = Not in **E**mployment, **E**ducation or **T**raining

・ ・ 職 業に就かず、教育・職業訓練も受けていない若者。無業者。イギリスで生まれた語で、2004年頃から日本でも問題化。

道の駅 ・ ・ 全国の一般主要道路に設けた休憩施設。駐車場・トイレ・売店などを備え、その地方の産業や観光の情報も提供する。

エコノミークラス症候群 ・ ・ 航空機内などで長時間狭い椅子に座り続けたために下肢の血液の流れが障害されて血栓ができ、急に立ち上がって運動した時に血栓塊が肺に詰まる疾患。急激な咳き込み・胸痛・血痰を催し、時にはショック死にいたる。（「飛行機のエコノミー・クラスの搭乗客に多く発症した」ことから）

メタボリック症候群 ・ ・ 内臓脂肪型肥満に加え、高血糖・高血圧・脂質異常症のうち二つを合併した症状。動脈硬化の危険因子として注目される。内臓脂肪症候群。

ユニバーサル・デザイン ・ ・ 年齢や障害の有無にかかわらず、すべての人が使いやすいように工夫された用具・建造物などのデザイン。

